

國學院大學学術情報リポジトリ

〔談話室〕 中国の普渡と祭鍊

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松本, 浩一, Matsumoto, Koichi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000590

中国の普渡と祭鍊

松本浩一

筆者は以前に、平成二十三年度の國學院大學中國學會大會で、話をさせていただいたことがあった。その時のテーマは「中国の中元節と普渡」というものだった。それから九年経ったが、現在でも普渡に関わる問題の研究が続いている。普渡は孤魂や厲鬼に食事を給するという内容の儀礼で、孤魂とは祭り手のない靈魂すなわち日本という無縁仏であり、祭ってくれる人がいないため、常に腹を空かしていると考えられている。厲鬼とは恨みを抱きながら死んだり、戦争や事故などによって突然生命を奪われたりした、日本でいう怨靈にあたる靈魂を指す。中国では古い時代から孤魂と厲鬼は、祟りを起こしやすい存在として恐れられてきた。現在普渡は中元節を中心とした旧暦の七月に、神々を祀った施設である廟や、あるいは市場、団地、町内会などを単位として広く行われている。人々は廟に用意されたテーブルに供物を持ちより、道士や僧侶などの宗教者がその前で儀式を行って、集った孤魂たちが十分に腹を満たせるように食を無量を増やすとともに、それを食べるという心から悟りや救済を望むような甘露食に変化させる。この普渡を行って、彼らの不満を満たし、また彼らを救済へと導くことで、祟りを起こすことのないようにするのである。

旧暦の七月は大学の夏休みに当たるので、しばしばフィールドにしている台湾を訪れるが、ちょうどその頃は各地で普渡が行われている。現在基隆の李游坤道長から様々な教えを受けているが、李道長たちは、旧暦七月は毎日のように普渡を行うために出かけていく。道士たちのほか、僧侶や普段は葬儀を施行する釈教と呼ばれる人たち、また主として中年の女性たちによって組織された誦経団と呼ばれる団体などは、仏教系の普渡の儀礼（焰口と呼ばれることが多い）を行っている。中元節に普渡が行われるようになるのは宋代のころからで、北宋時代的首都開封や、南宋時代的首都杭

州の繁栄の様子を記した『東京夢華録』や『夢粱録』には、中元節に仏寺や道教の宮觀で普渡を行っていたことが見えている。宋から元にかけての時代は戦乱が絶えず、従って大きな災害や疫病も多発しやすく、多くの死者が出るようになって、孤魂・厲鬼に当たる存在が多く生み出された。彼らは干ばつや更なる疫病の原因にもなるので、彼らを供養するために普渡がしばしば行われた。

普渡の儀礼書が成立するとともに、その簡略版もできてくる。それは祭鍊と呼ばれるが、宋元時代の祭鍊の儀礼書も数多く残されている。現在筆者はこの祭鍊の構成と役割とについて考察を進めている。宋代の小説には、ある人やその家族に事故や病気が頻繁に起こる場合、その原因を巫者つまり超能力者・靈能者に探ってもらうと、個人的な怨恨によって、死者が祟りを起こしていることが判明するという話がしばしば記載されている。このような場合、もしその怨恨が逆恨みでなく、陰謀で殺害されたなど、祟りの正当な理由をもっているなら、靈驗のある道士や巫者に頼んでも、呪術で追い払うことはできない。怨恨を持つ死者の靈魂を供養することで許しを得る以外に方法はない。怨恨関係はあの世にまで持ち越されるのである。この時に必要なのは死者救済の儀礼を行うことで、道教の大規模な黄籙齋と呼ばれる儀礼に参加させてもらうか、あるいは道士に祭鍊を行ってもらう。この祭鍊の系譜を引いているのが現在の超抜という儀礼で、たとえば松山駅に近い台北府城隍廟では、李游坤道長やその弟子たちによって、毎日午後四時からこの儀礼が行われている。超抜の内容は北部道士の行う普渡の簡略版である。この依頼者はやはり靈能者によって、原因不明の病気や連続して起こる事故などの原因が祟りにあることを突き止めてもらったあと、その解決のためにこの儀礼を受けにやってくる。李道長はこれを診断と治療のプロセスに例えているが、このプロセスは過去の出来事に現在の身体の不調の原因を探り、これを突き止め解消することで治療を行う精神分析の過程とも重なり、またシャーマンの行う治療儀礼の過程とも共通しているといえよう。